
魔法少女リリカルなのは～時空の守護者～

水月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜時空の守護者〜

【Nコード】

N7293M

【作者名】

水月

【あらすじ】

主人公である少年、神代凧は新暦71年4月29日に起こった、ミッドチルダの臨海空港で大規模火災の折りに、火事から命を助けてくれたフェイト・T・ハラOWNに恩を返すため、凧は四年後、親友と共に機動六課に出向する！※この作品は作者の処女作です。恐ろしくど素人ですが、それでも良いといわれる方は是非見てみてください！ ※タイトルを変えました。現在更新停滞中。

主人公紹介（前書き）

現在の主人公設定を載せておきます。

すみません。風の設定の方で一部変える……というか消去した部分があります。理由は主人公らしくないなど思ったので。………はい、勝手ですね。重ね重ね申し訳ございません。

後、主人公達が使っているカバラ式についての簡単な設定を載せておきました。詳細は後ほど、主人公達以外のオリキャラが出た時にも載せさせていただきます。

主人公紹介

主人公 1

名前……かみしろ神代 なぎ 凪

年齢……17歳

身長……182?

体重……55?

性別……男

容姿……黒髪黒眼。とある条件下で瞳の色が変わる。

髪は肩辺りで整えている。

顔は整っていて格好いいのだが本人自覚無し。

階級……准空尉

術式……カバラ式

魔力光……深い蒼（とある条件下で変わる事がある）

総魔力量……C+（リミッターが掛かっているため）

魔導師ランク……空戦A+

保有スキル

直感

戦闘時、つねに自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。研ぎ澄まされた第六感はやや未来予知に近い。視覚、聴覚に干渉する妨害を半減させる。

心眼（真）

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において、自身の状況と敵の能力を冷静に把握し、その場で残された活路を導き出す“戦術論理”。逆転の可能性が1%でもあるなら、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

???

現在詳細不明。

使用デバイス1

名前……龍

待機状態……ブレスレット

基本形態……日本刀

騎士甲冑……白を基調としたもので、純白に銀のラインの装飾が施されている胸甲と銀の籠手

使用デバイス2

名前……銀^{イシ}
待機状態……銀十字のネックレス
基本形態……魔導書

四年前の空港火災の際にフェイト・T・ハラOWNに助けられて以来、いつかその恩を返すために死に物狂いで修行した。地上本部特務部隊に所属し、今回機動六課に出向する事になった。

主人公2

名前……カイトIIグランツ

年齢……17歳

性別……男性

身長……167?

体重……50?

容姿……銀髪蒼眼。

髪は腰ぐらいまで伸ばしている。

顔は中性的で整っている。時には女と間違われることが。

階級……准空尉

術式……カバラ式

魔力光……透明に限りなく近い白（とある条件下で変わる事がある）

総魔力量……B＋（リミッターが掛かっているため）

魔導師ランク……空戦A A

保有スキル

心眼（偽）

第六感、虫の知らせとも言われる、天性の才能による危険予知。

無窮の武練

心技体の完全な合一により、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘能力を発揮できる。

精霊の加護

精霊からの祝福により、危機的な局面において優先的に幸運を呼び寄せる能力。

????

現在詳細不明。

使用デバイス

名前……ギアス

待機状態……ネックレス

基本形態……銃剣

騎士甲冑……黒を基調としており、漆黒に白のラインの装飾が施されている胸甲と黒い籠手

子供の頃から凧と付き合いがある親友。彼は一度見た物は一瞬で覚えて、永遠に記憶し続ける完全記憶能力を持っている。今回は神代中將の要求で機動六課に出向となった。

『カバラ式』

カバラ式とは凧の遙か昔の先祖が作り上げた魔法体系で、魔法陣はセフィロトの樹の様なものが出現する。

主人公紹介（後書き）

現在の設定なので後々更新します。

プロローグ（前書き）

初めまして、水月といいます。皆さんの小説を拝見していたら自分も書いてみたくなって書きました。処女作ですが、どうか温かく見守ってください。

プロローグ

新暦71年4月29日、ミッドチルダの臨海空港で大規模火災が起こった。

その空港には一人の少年がいた。

彼の視界は赤に染められている。

己を囲むように存在している炎を見て、彼は檻のようだと思った。周りをグルリと見渡し、少年は自らの腕の中で眠っている蒼い髪の少女を見た。

「はぁ……………」

少年は自身の状況を顧みて、思わず嘆息した。

出口を探していた途中で出会った、妹を捜しているのだという少女と共に彼女の妹を捜しながら出口も探していたのだが、途中で瓦礫が少女の後頭部に辺り、気絶してしまった。

仕方なく少年は少女を背負って捜索を続けていたのだが、その内に炎に囲まれてしまった。

「このままでは、俺もこの子も危ないか。……せめて銀を持っていたらな……ッ!？」

ガラッ、と彼の足場が崩れた。

急な事と少女を背負っていたのが災いし、彼はそのまま足を踏み外そうとしていた。

「ちっ!」

舌打ちと共に彼は背負っていた少女をまだ無事な場所に放り投げた。そのまま、背負っていて一緒に落ちるよりましだと判断したのだろう。

先に少女に無事を確認して、次に自身の状態を見て少年は嘆息した。

今、少年は片手のみで先ほどまで足場であった所にぶら下がっている。もう一方の手は先ほど無理に少女を放り投げた代償か、言う事を聞かない。

「こんな時に右腕が動かないとはな。……俺の命もここまでか。せめてあの少女だけでも助かってほしいが……この状況では難しいだろうな」

その様な事を呟いている内に、少年の手がある周囲も崩れ始めてきた。

少年はそれなりに下階との距離が離れているのを見て、今の状態

ではどうやっても無傷ですまないであろう事を予測していた。
そして彼の手がある場所まで崩れてきた時、声が聞こえた。

「危ない！」

その声と共に少年は自分が誰かに抱き留められている事を知覚した。

そして彼は落下すると思い、反射的に閉じていた瞳を開いた。
少年が初めに見たのは綺麗な金色の髪だった。

「綺麗だな……」

少年は自分を助けた誰かの髪に見惚れて自分でも気付かずに呆然としたままその様な事を呟いた。

その髪の持ち主はその言葉に反射的に頬を染めたが何とか体勢を崩すような事はなかった。

そして、少年を一度足がつく場所に下ろし、彼を助けた人物は彼に問いかけた。

「あの、大丈夫ですか？」

その言葉を聞いて、その人物に返事をしようと少年が向き直った瞬間、彼は呆然と見つめてしまった。

少年を助けた人物は彼とさほど背丈が変わらない少女だった。し

かし、その容姿は少年が我を忘れてしまうほどの美少女だった。
そんな少年の様子を疑問に思ったのか彼女は再度、彼に声を掛け
た。

「あの、本当に大丈夫ですか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

「良かった」

その言葉と共に微笑んだ少女を見て彼は顔を赤めらせた。
しかし、直ぐに我を取り戻し、少女に向き直った。

「君は助けに来たのか？」

「はい、そうです。それでは————」

「待ってくれ」

彼女が次の言葉を遮るように少年は言葉を発した。

彼の言葉に一瞬驚いたような顔をしたが直ぐに詳細を求めた。

「どうしました？」

「俺よりも先に上階にいる少女を救助してやってほしいんだ」

「え!？」

少年の言葉に少女は驚いたようだった。
そんな彼女を見ながら彼は言葉が続けた。

「上階にいる子は気を失っている。まだ、意識を保っている俺よりも先に救助をしてやってくれ」

「ですが……………」

「大丈夫だ。僅かな時間なら何とかなる」

「……………」

少女は俯いて黙り込んでしまった。
しかし、直ぐに面を上げた。

「分かりました」

「ああ、よろしく頼む」

少女は少年の言葉を聞いて行こうとしたが、少し考えて振り返った。

「……………名前を聞いても良いですか？」

「ん？」

少女の言葉を不思議に思ったのか、少年は首を傾げた。
しかし、少女の問いに特に疑問を抱かずに答えた。

「俺は神代^{かみしろ}凧だ。……君の名前は？」

「私はフェイト・T・ハラオウンです」

これこそが少女——フェイト・T・ハラオウンと少年——神代凧
の初めての邂逅だった。

彼等の再開はこの後、四年後に持ち越される。

その年は彼等の世界にとって一つの転機ともいえるのだが、今の
彼等が知るような事はない。

プロローグ（後書き）

すみません、勝手ながら主人公の名前を変えてしまいました。
感想待ってます！

第壱話（前書き）

どうも、水月です。いきなりですが内容を大幅に変更することになりました。勝手な事をして本当に申し訳ございません。

第壱話

「はあ……………」

機動六課の隊舎前に佇んでいる、まだ顔立ちが幼くどちらかといえば少年に属する二人の少年の内の一人である、黒髪の少年が溜息を吐いた。

「どうしました、風？」

そんな少年——風に疑問を持ちかけたのはもう一人の己の銀髪を揺らしている少年だった。

「いや、何で俺達はこんな所にいるんだろうな、と思ってな」

「ああ、なるほど。まあ、少将の命令ですし、一々気にしていたら持ちませんよ。僕よりも貴方の方が分かっているでしょう？」

「確かにそうだが……………」

そこまで言って、風は何故自分たちが機動六課に来る事になった時の事を思い返していた。

地上本部にある、とある部隊の部隊長の部屋に二人はいた。

「出向、ですか？」

「ああ、お前等には機動六課に出向して貰う」

銀髪の少年——カイトの問いに答えたのは自分のデスクにの前に座っている偉丈夫——神代少将だった。

「何故ですか、父上？」

「まあ、気紛れだな」

「少将……………」

少将の言葉にカイトは肩を落とした。

そんな、カイトの様子を見て中将は笑った。

「冗談だ。……実際は知り合いに頼まれたんだ。名前を明かす事はできないが、旧知の間柄だからな。拒否するのは憚られてな」

神代少将はそこで一端言葉を切った。

「まあ、もう手続きは済んでいるから、荷物を纏め次第出発しろ」

少将の言葉で二人は再び肩を落とした。

二人の様子を見て中将はこう付け足した。

「そうそう、凧。機動六課にはお前の恩人もいるからな」

「え？ 本当ですか、父上？」

父親の言葉に凧は、先ほどまで落ち込んでいた気持ちを高ぶらせ

ながら答えた。

「ああ、これでお前が行く理由はできたな」

ニヤリ、と笑みを浮かべながら少将は言った。

そんな中将与凧の様子にカイトはもうこれ以上行っても無駄な事を悟り、嘆息した。

「……そうですね。……では、これから荷物を纏めます」

凧はそう言って自身の父親である神代少将に敬礼した。

それに習ってカイトもまた、少将に敬礼した。

そして、二人は連れ合って部隊長の部屋を後にした。

回想が終わって、凧は苦い顔をした。

「なんか、自業自得な気がしてきた」

「そうですね。まあ、貴方は恩人に会えるからいいじゃないですか」

「そうだな。……………じゃあ、そろそろ往くか」

凧の言葉に従い、付いて行こうとしたカイトの足が止まった。

「……………そういえば、部隊長室の場所を少将に聞いてませんよね」

「……………何とかなるように祈っておこう」

話をそこで切って二人は機動六課に足を踏み入れた。

第㉔話（後書き）

前書きでも書きましたが、勝手に内容を変更して本当に申し訳ございません。

第貳話（前書き）

今までこの小説を放置して申し訳ございません！この後の展開が今一思い浮かばなくてずっと更新が止まってしまいました！重ね重ね、誠に申し訳ございません！

第貳話

凧達は機動六課の隊舎内を巡っていたのだが、

「……迷ったな、これは」

そう、絶賛迷子中なのである。

「そうですね。……それにしても、誰ともすれ違わないとは計算違いでしたね。もし迷っても誰かに聞けば、と思っていたのですが……」

「だな。まあ、根気よく探すしかないだろ。この時間帯、父上は仕事だろうから通信は繋がらないしな」

そこで彼等は言葉を句切って、再び隊舎内を巡る事にしたのだった。

S i d eなのは

新人達の訓練をするために空間シミュレータに行こうとしたら、はやてちゃんから「部隊長室に来てくれへんか？」って連絡があったけど、どうしたんだろう？

「なにか任務でも来たのかな」

そんな事を呟いて、一人で通路を歩いていると前方に長い金髪、フェイトちゃんの姿が見えた。

「フェイトちゃん」

「あ、なのは」

「フェイトちゃん、どうしたの？……もしかしてフェイトちゃんもはやてちゃんに？」

「え？なのはもなんだ。私もはやてに呼ばれて部隊長室に向かっているんだ」

やっぱり。

「何かあったのかな？」

「うーん。朝のミーティングでは何も言ってなかったけど………」

その後、二人で考えたけど何も浮かばなかった。

「とりあえず、はやてちゃんの所に行こう」

「そうだね。行こっか」

フェイトちゃんと一緒にはやてちゃんの所、部隊長室に向かって歩き出す。

けど、本当に何があったんだろう？

歩きながらそんなことを考えていたら、

「すみません。部隊長室にはどう行けばいいのですか？」

と、声を掛けられたので振り向くとそこには、二人の男の子がいた。

なのはSide Out

時は少しだけ遡る。

風達はいま、T字路に突き当たってどちらに行こうか迷っていた。

「どうします？」

「……右に行こう」

風の言葉に従ってカイトは、右の通路に向かおうとして、足を止めた。

その理由にほぼ同時に風も気づき、同じく足を止めた。

「……………人の気配ですね」

「ああ、この通路の百メートル先といった所か」

忍者かお前等は、と突っ込みたくなるような事を話し合っている二人。

「ふう。これで、道が聞けますね」

「ああ、急ぐか」

彼等はそのまま、できる限り足音を立てないように早歩きで目標に向かった。

暫くして前方に目標を視認できる場所まで来た。そして彼等の視界に映ったのは二人の女性だった。

しかしそこで、風は一瞬だけ速度を落とした。

前方に見えた人物の一方の髪が見覚えのある金髪だったのを確認して、本人も気付かないうちに自然と呟いた。

「フェイト・T・ハラオウン……………」

その言葉を耳にしたカイトは風視線をやった。

その事に気付いた風は、少ばかり顔を赤めらせて顔を逸らした。カイトは含み笑いをしながら、黙って視線を前方に戻した。

そして、ついに女性に話しかけられる位置まで来て、カイトが声を掛けた。

「すみません。部隊長室にはどう行けばいいのですか？」

カイトの言葉に前方の女性二人は振り返った。

振り返った女性はエースオブエース、管理局の白い悪魔こと高町なのはとフェイト・T・ハオラウン執務官だった。

「えーと。あなた達は？」

なのはの問いに先に答えたのはカイトだった。

「本日付けで機動六課に出向になりました、カイトⅡグランツ准空尉です」

「……同じく本日付けで機動六課に出向になりました、神代風准空尉です」

敬礼しながらそれぞれ向上を述べた。

その事を聞いてなのは達は怪訝な顔をした。フェイトはなのはと違って別の事が引っかかっているようだが。

「ねえ、フェイトちゃん。出向の事知ってる？」

「……………」

「フェイトちゃん？」

なのはは自身の問いかけに反応を示さないフェイトに声を掛けた。

「…………えっ！？な、何、なのは？」

「……………どうかしたの？」

フェイトはなのはの問いに答えずに、とある方向に視線を向けた。なのはもフェイトの視線を追って見ると、そこには風がいた。風は二人に見つめられて居心地悪そうにしながら口を開いた。

「あゝ、お久しぶりです、ハラOWN執務官。四年前は助けて頂きありがとうございます」

「……………やっぱり、あの時の男の子なんだ」

「名前で分かりませんでしたか？」

「いや、だって、四年前とはかなり違うから、同一人物かどうか今一確証が持てなくて……………」

「…………なるほど」

フェイトの言葉に風は苦笑しながら答えた。

実際風は四年前とはかなり変わっている。その最たる所は身長であろう。四年前は百三十か百四十かそこらだったのに今では、百八十を超している。顔付きも、男らしくなっているので、フェイトが分からなかったのはある意味当然といえよう。

「ハラオウン執務官は昔変わらずお綺麗で」

「え／＼／」

フェイトは風の言葉に顔を赤めらせた。

そんな二人を今まで黙って見守っていた内の一人である、カイトが口を開いた。

「…………そろそろいいですか？ 風にハラオウン執務官」

突然発せられたカイトの言葉に風とフェイトは驚いた。

彼等は今まで、カイトとなのはを無視して会話をしていた事に気づき、少し顔を赤めらせて申し訳ないような表情になった。

それを見てカイトはなのはの方を向いた。

「それでは高町教導官、部隊長室の方に案内してくださいませんか？」

「うん、いいよ」

なのははカイトの言葉を聞き、部隊長室がある方向に向かって歩を進めた。

カイトは当然のように付いていくが、風とフェイトは先ほどの事もあり、未だに顔を赤めらせて付いて行った。

第弐話（後書き）

駄文ですが、感想待ってます！

第参話（前書き）

なんとか更新できました。相変わらず駄文ですがよろしく願います。

《》は念話です。

後今回は出ませんが『』はデバイスです。

追伸、作者は英語が苦手なのでデバイスとの会話はほとんど日本語で書くと思います。すみません！

9／26 内容変更。

第参話

時は遡り、部隊長室では。

「遅いなあ」

「遅いですう」

うち―八神はやては隊長陣が一向に出来ない事にリインと一緒に詰まらさそうに呟いた。

本当に遅いなく、みんな。

そんな事を考えていた時に部隊長室の扉が開いた。

「すみません、主。遅くなりました」

「はやて、ごめん」

謝りながら扉から入ってきたのは、うちの守護騎士のシグナムとヴィータや。やっと来てくれたなく。

「ええよ、まだなのはちゃん達も来てないしな」

「そうですか。……それで主、今回はどうなされたのですか？」

「なにか、あったのか、はやて」

やっぱり気になってるか。まあ、理由も言わずに呼んだらそうなるよな。

「まあ、なのはちゃん達が来てないから詳しい事は後で言うけど、地上本部特務部隊っていうところから出向者が来るんよ」

「え!？ 本当なのか、はやて!」

うちの言葉にヴィータは驚愕して声を上げた。

? どうしたんや、ヴィータ?

うちはヴィータの驚きように疑問を抱いて話しかけた。

「どうしたんや、ヴィータ?」

「あ、いや。……まさか、あの部隊から出向者が出るとは思わなくて………」

「ヴィータは地上本部特務部隊の事知っとんの?」

「まあ、昔研修に行った事があるから……。そうか、あの部隊から………」

ヴィータはそう呟きながら少し遠い目をした。

ほ、本当にどうしたんや、ヴィータ。

「な、なあ、ヴィータ。その部隊には何かあんの？」

「いや、別に何かあるって訳じゃないけど……。あ、そうだ、はやて。誰が来る事になってるの？」

ヴィータの言葉に多少戸惑いながらも、うちはこれから機動六課に出向される者達の資料をヴィータに見せた。
その資料に記されている者の名を確認して、ヴィータを安堵の溜息を吐いた。

「なんだ、こいつらか……………」

「ヴィータはその子達の事、知っとるんや？」

「え、まあ、うん」

ヴィータはうちの言葉に曖昧な返事を返してきた。

……まあ、ええか。後で、聞けば。

「まあ、もう少ししたら、なのはちゃん達も来るやろうし、それまで待とか」

「そうですね、主」

うちとシグナムの言葉で一端会話は終わったんやけど……………全然来うへんなあ。」

「遅いなあ」

「遅いですう」

「主、神代凧という者とカイトⅡグランツという者が来るのは今日で間違いないのですか？」

「ていうか、本当に来るのか、彼奴ら？」

「うゝん。シグナム達が来る前に部隊に付いたって連絡はあったから、もうすぐ来ると思うんやけど……………」

うちの言葉にヴィータが少し悩んでこう口にした。

「まさか、あいつら、迷子になってないよな……………」

……………否定できへんな。この隊舎かなり広いし、案内板とかも特に無かったはずやし。……………やばい、本当に迷子になったかもしれへん。

「はやて、あたしが探しに行こうか？」

「んー、もうちょっと待ってみよ。入れ違いになっても困るし、もうちょっと待っても来なかった時は頼むわ」

「分かった」

もうちょっと待っても来なかったら、本当にヴィータに頼んで探してもらおうかな、と考えていると部隊長室の扉の向こうから声が聞こえた。

「はやてちゃん、来たよ」

「私も来たよ。後、はやてにお客様も」

「失礼します」

その言葉と共に部屋になのはちゃんとフェイトちゃんが二人の少年を連れてやって来た。ん？あの子等は………ああ、出向者の………

彼等の顔を見てうちはそう思い当たった。先、ヴィータオキの見た資料に添付されてた写真に載ってたわ。

「その子等連れてきてくれておおきにな、なのはちゃん、フェイトちゃん」

「あ、やっぱり、はやてちゃんはお向者の事知ってたんだ？」

「まあ、その子等が来る事を伝えようとしたんやけど、先に接触したみたいやね」

「うん、迷ってたみたい」

……………やっぱりかー！道理で遅いと思ったわ。

うちは胸中でその様な事を呟きながら視線を、お向者の子等に向けた。

「うちがこの部隊の部隊長の八神はやてや」

うちの言葉に彼等は敬礼した。

「本日付で機動六課に出向となりました、神代風准空尉です」

「同じく、本日付で機動六課に出向となりました、カイトⅡグランツ准空尉です」

うん、しっかりしとるな。これで、地上本部特殊部隊からの出向者の半分が来たなあ。後二人は遅れてくるって話やけど、どんな子等やろなあ……………



「本日付で機動六課に出向となりました、神代風准空尉です」

「同じく、本日付で機動六課に出向となりました、カイトⅡグラン
ツ准空尉です」

俺とカイトは部隊長を名乗った人に敬礼した。いや、敬語は疲れるな。なんで、カイトはいつでもあの口調を保てるんだろう？かなり、疑問に思っているんだが？まあ、いいか。カイトはカイト、俺は俺だ。

そんな事を考えていたらそれなりに聞き慣れた声が聞こえた。

「お前等、久しぶりだな」

ん？

首を傾げながら声が聞こえてきた方に顔を向けるとそこには、偶に神代隊に遊びに来る、ヴィータがいた。

「そうだな、ヴィータ。元気にしていたか？」

「当たり前だろ」

「ははっ、そうですね。ヴィータが元気でない姿なんて想像できませんね」

「それはどういう意味だ、カイト」

「さて、どういう意味でしょうね？」

「……………カイトも何時までも人を弄ろうとする癖が直らないな。いや、治す気がないのかもな。まあ、俺には関係ないが。そこまで考えて俺はほぼ無意識の内に嘆息した。」

「あの君等、ヴィータも。雑談は後回しにして貰いたいんやけど……………」

「「あ、すみません。部隊長」」

「い、ごめん、はやて」

謝る俺等を見て苦笑する部隊長。…………いや、ちょっと忘れかけてたな。危ない危ない。

「じゃあ、みんなもそれぞれ紹介よろしくな」

「じゃあ、わたしから……………」

部隊長の言葉に高町教導官が応じた。

「私はスターズ分隊長の高町なのはです。よろしくね」

「あたしはなのと同じ、スターズ分隊長の副隊長をしてるからな」

高町教導官―これからは高町隊長って言った方が良いか―に続いて、ヴィータも付け足すように言ってきた。ていうか、ヴィータが副隊長、か。まあ、俺達がどの分隊に配属されるかはまだ分からないけど……………できたら同じ分隊の方が気が楽なんだがな……………

「私はライトニング分隊長のフェイト・T・ハラOWNです。よろしくね」

「私はライトニング分隊長を務めているシグナムだ。宜しく頼む」

……………どうする。恩返しという意味では、ライトニング隊に配属された方が役に立てるだろうが……………まあ俺が悩もうが、先考えた通り部隊長次第だし、考えるのは止めるか。

「あなたが神代風さんとカイトⅡグランツさんですね」

と、丁度考えるのを止めた時に妖精のような人物？が俺達の前に浮遊しながら、声を掛けてきた。

「私はリインフォース？です。リインって呼んでください」

……………ああ、この子が。

《銀、この子がお前に後継のようだぞ》

《……………ああ、そのようだな》

《お前から何か言いたい事はないか？もしあるなら代わりに伝えてやるが……………》

まあ、自分で伝えてくれた方が楽なんだが、銀はまだ部隊長達と顔を合わせるつもりはないようだな。

《……………では、少しだけ……………》

そう言って銀が伝えてきたのは俺自身の口からはかなり話しづら

い事だった。……これを伝えたらかなり俺が怪しまれそうなんだがな。……まあ、言い出したのは俺だし伝えるか。

「リイン、君に少しだけ言いたい事があるんだがいいか？」

「？　なんですか？」

「まあ、初めて会った俺が言うのは可笑しいんだが………」

俺はそう前置きして、

「……祝福の風、リインフォースの名を次ぐ君は先代の意志を継ぎ、主、そして守護騎士達を護ってやれよ。それが先代リインフォースの願いだろうからな」

俺の言葉を聞いたリインは暫く呆然としていたが、直ぐに満面の笑みで頷いた。

「はいですう！」

「ん、良い返事だ」

リインの返事に俺もまた少しだけ笑みを浮かべた。

《いきなりどうしたんですか？》

《ん？カイトか。……銀に頼まれてな》

《ああ、なるほど。……彼女はまだ主達に姿を出現みせないつもりなんですか？》

《そうらしい。別に俺は気にしないんだけどな。彼女が本当の主の所に戻る事は………》

《まあ、彼女自身色々複雑なんでしょう。……本来彼女は十年前に消えたはずなのですから》

《………そうだな。こればかりは俺も無理強いはできない》

そこで俺達は念話を切った。これ以上は部隊長達に怪しまれそうだしな。

「部隊長、俺達はどの分隊に所属すれば？」

「あ、その事なんやけど……君等の部隊から後二人程、出向者が来るらしいな？」

「え？　そうなんですか？」

聞いて無いんだが……

俺はそう思っ
てカイトに視線をやるとカイトも知らないといった風
に首を振った。

だよな。……………はあ、父上も予め言っておいてくれると助かる
んだけどな。

「なんや、君等も知らなかったんか？」

「ええ」

「まあ、それはともかく……。それでな、後二人の出向者も揃った
時には君等で分隊を一つ作ってもらおうと私は考えとるんやけど、
ええかな？ 先、資料を見た所、^{さつき}凧君とカイト君は小隊指揮の資格
を持ってるみたいやし」

さすが、と言った所だな。というか、よく見ているなあ。…………何
時取ったかも分からない資格を見つけてくるとは。

「分かりました、八神部隊長」

「ええ、僕もそれで良いですよ」

「じゃあそう言うことでよろしくな。で、部隊名なんやけど…………どう
する？」

部隊名か、そうだな……………

「では、カバラにして貰えますか？」

「ふむ？ ……ええよ。じゃあ、部隊名はそれで決まりな。詳しい話は残りの出向者が来てからにしようか？」

俺は八神部隊長の言葉を聞きながらカイトに視線を向けた。俺に視線に気付いたカイトは此方を向いて頷いた。……カイトも良さそうだな。

「はい、その様にして下さって構いません」

「なら、頼むな。あ、それと、この後君等には模擬戦をして貰うで」

「「は？」」

部隊長の突然の言葉に俺達は呆然と声を漏らした。……………何故に？

俺達の表情を見て、部隊長はさらに口を開いた。

「ほら、君等のことは資料でしか知らんから、模擬戦で実力が見てみたくな」

ああ、なるほどな。実力を量っておこうと。

「それで、部隊長。俺達は誰と模擬戦をすれば？」

「そうやな、君等のポジションからして、凧君はシグナムと、カイト君はなのはちゃんとやってもらおか」

……………俺はともかく、カイトは大丈夫なのか？

視線をカイトに向けてみると、笑みを深くしていた。

……………心配いらなかったな。むしろ、怖いな。

そして俺達は訓練室に向かう事となった。

第参話（後書き）

感想または誤字脱字の指摘よろしくお願いします！

第肆話（前書き）

どうしてこうなった……………

戦闘描写を入れるつもりだったのにほぼ無い。……………これが作者の限界なのか！

……………すみません。取り乱しました。今話は今までになく長いですが、戦闘描写はほぼありません。楽しみにしておられた読者様申し訳ございません！……………いや、いるのかな。こんな駄文を楽しみにしてくださっている読者様なんて……………

まあ、気を取り直して……………第肆話始まります！

後、言い忘れていましたが、今回から後書きで次回予告などをする予定です。

第肆話

訓練室に来た俺達はまず、俺とシグナム副隊長が模擬戦をする事になった。

「さて、バリアジャケットを展開しろ」

ん？バリアジャケット？……………ああ、カバラ式の事は詳しく知らないのかな、シグナム副隊長は。

「シグナム副隊長、俺達のカバラ式の防護服の呼び名も騎士甲冑ですよ」

「む？そうなのか。まあ、騎士甲冑でも良いからさっさと展開しろ」

……………あの、シグナム副隊長の目が怖いんですが。絶対戦闘狂だ、この人。

そう思っていると、シグナム副隊長が紫色の騎士甲冑を纏った。そして、彼女の手には片刃の長剣が握られた。
じゃあ、次は俺だな。

「龍、セットアップ」

『了解しました、主。S e t u p』

龍の声と共に俺は白を基調とした騎士甲冑を纏い、大太刀の様な日本刀が鞘の収まったまま、手中に収まっている。

俺はシグナム副隊長と向き合いながら、銀に念話を飛ばした。

《なあ、銀。シグナム副隊長ってかなり強いよな？》

《ああ、ヴォルケンリッターが一人、『烈火の将』だからな。……まあ、お前が全力で戦ったら確実に勝てると思うが？》

《はは、それができないのは俺のデバイスである君ならよく分かっているだろう？》

《まあ、な。一つだけ言っておくなら将は『炎熱』の魔力変換資質を持っているからな》

《知ってるよ。君が昔教えてくれた事だろう》

《……………そうだったな》

そこで俺は念話を切った。

「……………そういえば、先ほどお前は気になる事を言っていたな」

いきなり、シグナム副隊長が口を開いてそんな事を言ってきた。

……やっぱり、引つかかるか。もう少し、表現を変えて伝えるべきだったか。

「……………気になる事とは？」

「先ほど貴様はリインフォースに『祝福の風、リインフォースの名を次ぐ君は先代の意志を継ぎ、主、そして守護騎士達を護ってやれよ。それが先代リインフォースの願いだろうからな』と言っていたな。……………あの台詞はまるで……………」

「——初代リインフォースを知っている、とでも言いたいのですか？」

「……………ああ」

まあ、そうなるだろうなあ。

「知っていますよ。十年前の事件の詳細も。あなた方、守護騎士ヴオルケンリッターのことも」

「……………何故お前が知っている？」

シグナム副隊長の言葉に俺は悩んだ。

いや、その事を答えたら絶対の銀に怒られるんだよな。……………
そうだ！

「この模擬戦、貴方が勝てれば答えましょう」

「……………良いだろう。私が勝てば答えて貰うぞ」

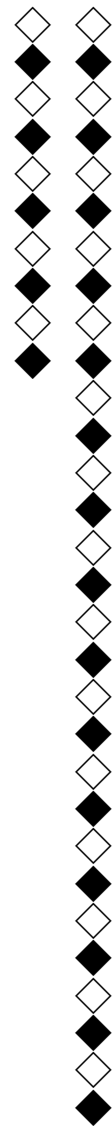
勝てば、な。

心の中でそう思って俺は龍を抜き、正眼に構えた。それに習って、シグナム副隊長も構えた。

「始めるぞ」

「何時でも」

それぞれ言葉を発し、俺達は対峙した。
さてと、頑張るか！



「なかなか、始まりませんね」

僕と隊長達は眼前で向き合ったまま、模擬戦を開始しない風とシグナム副隊長を見てその様な事を呟いた。

「そうだね、何を話してるんだろう？」

「……………まあ、十中八九先ほどの風の発言の事でしょう」

口の動きを見てもそんな感じの事を喋っていますし。
俺の呟きを捉えたヴィータがこちらを見てきた。

「なあ、カイト。何で凧は先あんな事を言ったんだ？」

「……………ヴィータ。何故それを僕に聞くのですか？」

「いや、カイトだったら答えられそうな気がしたんだ」

……………直感のスキルでも持っているんですか、ヴィータ。
思わず心の中で僕はそう呟いてしまった。

「まあ、一応凧の発言の理由については知っていますが、その事は
凧に直接聞いてください。僕が言う事ではないので」

「……………分かった。じゃあ、後で凧に直接聞くか」

……………素直に答えてはくれないでしょうけど、頑張ってください
い、ヴィータ。

「すみません、遅くなりました」

「「遅くなりました」」

と、突然背後からそんな声が聞こえた。気になって振り返ってみ
るとそこには四人の少年少女がいた。なんだか、見覚えがあるのが
いるような。

そんな事を思っている僕を無視して高町隊長が口を開いた。

「まだ、大丈夫だよ、みんな」

「そうですか、それよりなのは隊長、シグナム部隊長と向き合っている人は何方どなたですか？」

「あ、彼は神代風准空尉だよ」

「え！？どうして風兄が！？」

ん？風兄？……………ああ、なるほど彼女ですか。暫く見ない内に変わりましたね。気づきませんでした。

「おーい。スバル、僕は無視ですか？」

「え？カイトさん！？ど、どうしてここに！？」

「出向です。聞いてませんか？」

「聞いてないよ！」

……………そういえば、高町隊長も始めていった時は出向の事を知りませんでしたね。八神部隊長、職務怠慢では？

「まあ、スバル。再開の挨拶はそれぐらいにして皆さんに挨拶をさせてください」

「あ、ごめんなさい、カイトさん」

……何故僕と風では接し方が違うのでしょうか。風が相手ならもつとフランクなのに……。まあ、気にしても仕方ありませんか、後で聞きましょう。

僕は呆然としたまま佇んでいる三人に対して敬礼した。

「初めまして、僕はカイトⅡグランツ准空尉です。この度、あちらでシグナム副隊長と向き合っている者と共に機動六課に出向となりました。これからよろしくお願いします」

「あ、私はティアナ・ランスター二等陸士であります！こちらこそよろしくお願いします」

「僕はエリオ・モンディアル三等陸士であります！よろしくお願いします」

「わ、私はキャロ・ル・ルシエ三等陸士であります。よろしくお願いします。それでこちらはフリードリヒです」

「きゅくる」

いや、皆さん元気ですね。それにしても竜ですか。……嫌な予感がしますね。

すると、突然フリードリヒが僕に向かってきた。

「きゅくる〜♪」

フリードリヒは僕の頭上に陣取った。……………やはり、こうなりますか。

「ふ、フリード。だめだよ！」

「いえ、構いませんよ、ルシエ三等陸士。こういう事は慣れていますから」

さてと、まあ、フリードリヒももうフリードで良いですねーは放って置きましょう。

僕はスバルの方を向き直った。

「それにしても……………久しぶりですね、スバル。元気になっていましたか？」

「あ、はい、カイトさん」

「そうですか。いや、始めは随分変わっていて気づきませんでしたよ。……………女性らしくなりましたね」

「え、あ、ありがとうございます／＼／」

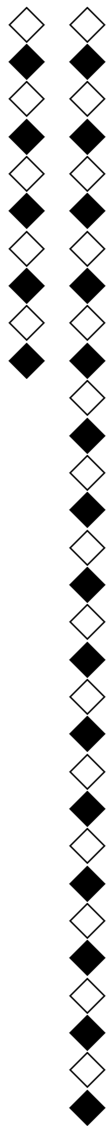
何故、顔を紅くするんでしょう？……………ん？

僕は凧達の方に視線を戻した。……………始まるようですね。

「スバル、凧の戦いを見ていた方が良いでしょう。今回は刀を使うようですが体捌きは参考になるでしょう」

「あ、はい。分かりました、カイトさん」

さてと、凧。リミッター有りとはいえ負けて貰っては困りますよ。
あ、そうそう。高町隊長は僕達が話している時に他の人達に「訓練は模擬戦が終わってからするね」と言っていました。……………スバルは聞いていましたかね。



私と神代は幾度か衝突を繰り返したが、どちらも決定打は放てずに二十合程経過し、今は膠着状態に陥っている。神代と実際に斬り合ってみて分かったが、やはり強いな。経験では私が勝っているが、才能は神代の方が上か。……出来れば認めたくないことだがな。だが、事実はあるのままだに受け入れる必要があるだろう。

神代は正眼に構えたまま動かない。……隙が見あたらないな。だが、私のためにも、何より主のためにも負けられん！

「……やはり、強いか。……仕方がない、正攻法は止めよう」

突然神代がそう呟いた次の瞬間、神代が消えた。……いや、

「其処だ！」

「む！？」

背後から私に斬りかかってこようとしていた神代の刀を受け止めた。……やはり、か。

「その歩法はカバラ式の……『瞬動』、だったか？」

「へえ。知っているのか」

「昔、カバラ式の騎士と戦ったことがあってな」

以前にカバラの使い手と戦っていなかったら、危なかったな。

「なるほど。流石、ヴォルケンリッターの将、と言った所か」

「……嫌みのつもりか？」

「いや、素直に賞賛しているだけだ」

やはり、遠慮は無用のようだな。

「レヴァンティン！カートリッジロード！」

『explosion』

私の声に呼応し、レヴァンティンの刀身に炎が纏われた。

「……………カートリッジシステムか。羨ましい限りだな」

心底羨ましそうに神代が言葉を漏らした。
「どういう事だ？カバラ式とやらには無いのか？」

「そちらにはカートリッジシステムは搭載されていないのか？」

「……………そうだな。こいつにはないな」

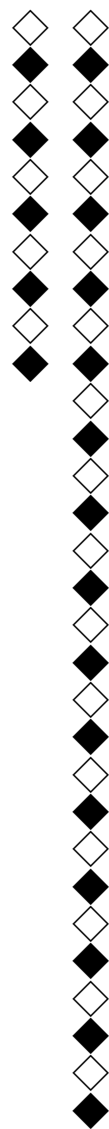
「どういう事だ？」

「ま、カートリッジシステムは無いものだと思って貰って良い」

「……………そうか。では、往くぞ！」

私は神代に向かって、レヴァンティンの刀身の炎を纏わせたまま
駆け出した。

模擬戦はまだ、始まったばかりだ！



ふむ、と言うことは、遠慮は無用だな。……リミッター付きでなければもう少し楽しめたかもな。

俺は瞬動にて瞬時に距離を詰め、シグナム副隊長に袈裟懸けに斬りかかった。それを受け止められるのを予期して俺は次の動作に入った。

罅迫りになっている所を側面から殴り飛ばした。……ちよつと炎が熱い。

「な!？」

シグナム副隊長の驚愕を無視して、そのままの流れで蹴りを放った。

「くッ！」

呻き声を上げながら遠方へと飛んでいった。
それを俺は瞬動で追いついて、まだ体勢を立て直していないシグナム副隊長に斬りかかった。

「氷雷一閃！」

冷氣と雷撃が混ざった斬戟をお見舞いした。

……ん？受けきられた？……読みが甘かったか。

そう思っていると俺の斬戟で沈んでいた、シグナム副隊長が立ち上がった。多少、騎士甲冑にダメージがいつているようだが眼光は鋭い。

……………称賛に値するな。烈火の将というだけの事はある。

「……今のは、魔力変換資質か？」

「ああ、一応氷結と電気を持っている」

まあ、まだあるが今は明かさなくても良いだろう。

「そうか。……この調子では私が勝つのは厳しそうだな。……………
次を最後の一撃にさせて貰うぞ」

「分かった。ではこちらもそれ相応のものを出そう」

「……………感謝する」

いや、一応俺も騎士だからな。感謝されても困るんだが。

「あれで往くぞ、龍」

『……………一応忠告しますが…………主、やりすぎないでください』

龍の言葉に無理だな、と心の中で返し、俺は鞘に龍を納めて居合の構えを取った。

それを見て、俺が次に繰り出すものが分かったのか、真剣な表情で再びカートリッジを使用していた。

互いの距離は数歩分、一息で詰められる距離。互いにタイミングを計っているのがわかる。

そして、何の前触れもなく同時に駆け出した。

「紫電一閃!!!!」

「光覇氷刃!!!!」

激突した刃と刃。そして、俺達を中心に衝撃が走り土煙が高々と舞った……………



書類を手早く終わらせたうちはリインと一緒にシグナム達が模擬戦をしている訓練室に向かった。

まあ、抜け出す時にグリフィス君が「たいちょ———！」って叫んでたけど………気のせいかな！

そう決めつけてうちは肩に乗っているリインに話しかけた。

「もう、どっちかの模擬戦は終わってもうたかな」

「どうでしょう？彼等次第じゃないですか、はやてちゃん？」

「まあ、そうやな」

そんな話を話していたら、いつの間にか訓練室に付いていた。

訓練室に入るとなのはちゃん達や新人達、そして遠方で向き合っている、シグナムと凧君が目に入り、うちはなのはちゃんに声を掛けた。

「どうや、模擬戦は？」

「あ、はやてちゃん。まだ、シグナム達がやってるよ」

「そうなんか」

私が納得して、シグナム達の方を向き直った瞬間、駆け出し衝突していた。

その際に土煙が大きく舞ったので、見えなくなった。

「あ……………」

「ん？」

眩きを拾ってその方を見てみるとカイト君が額に手を乗せて、仰向けになっていた。

「どうしたん、カイト君？」

「あ、はやて部隊長。………いえ、風が放った一撃でシグナム副隊長が無事かどうか心配になりました………」

「は？」

シグナムが無事かどうかってどういう事？

カイト君の言葉にそう思ってシグナム達の方を見てみると、そこには気絶したシグナムを風君が受け止めていた。しかも、シグナムのレヴァンティンの刀身がなくなってる。

………何があつたんや？

風君は気絶したシグナムを抱えて——俗に言うお姫様だっこ——でこちらに向かって歩き出した。

第肆話（後書き）

水月

「いや、矛盾が有りすぎるな」

凧

「そうだな、作者」

水月

「……………気にするな！」

凧

「どうしよう、この駄目人間^{作者}」

カイト

「まあ、屑人間^{作者}だから仕方ありませんよ」

凧

「そうだな」

水月

「お前等、作者^親を敬え！俺がいなかったらお前等自体存在してないんだぞ！」

カイト

「そこだけは感謝していますよ」

凧

「ああ」

水月

「……………貴様等な。まあ、いい。次話の簡単な予告というか、予定の紹介だ」

凧

「ああ、そうしよう。……………次話というか伍話では二つに分けて書くつもりらしい」

カイト

「簡単に言えば、凧編とカイト編といった感じに表と裏話といった感じにするらしいです」

凧

「ま、作者の文才の無さが原因だな」

カイト

「ええ」

水月

「予告だけしろよ！まあ、いい。ではまた次回、お会いしましょう！」

凧・カイト

「これからも駄目^{作者}人間の駄文をよろしくお願いします！」

水月

「誤字脱字の指摘もお願いします！」

第伍話（前書き）

あれ、おかしい。どうしてこうなった。……………前話でも同じ事を言ったような気がする。

まだばらすつもりはなかったんだけどなあ……………なぜ？

まあ、いいか。……………第伍話、風編始まります！

第伍話

はあゝ。

『やりすぎです、主』

「言うな、ちょっと後悔してるんだから」

《……………本当か？》

「本当だって、銀。流石に今回はやりすぎた」

デバイスにここまで攻められる主は今まで居ただろうか、いやない。

『主が悪いのですよ』

《そうだぞ、風》

五月蠅い！あと、人の心を読むな！

龍達とその様な話を話しながら、みんなの所へ歩んでいた。カイト達の所へ付く頃にはほとんど龍だけが攻めてきたが。

それで、カイト達の所に行って始めに掛けられた一言は――――

「風、やりすぎですよ」

——だった。……カイト、そんな暗い笑顔は止めろ。余波で後ろの奴らも怖がってるから。

「まず、正座しなさい」

「……………はい」

この状態のカイトに逆らったら死ぬ。

俺はそつとシグナム副隊長を床に下ろし、正座した。

「あのですね、対人で『光覇氷刃』なんて使わないでください」

「いや、あのな。シグナム副隊長に合わせてだな……………」

「全然合っていませんから。技の危険度が違います。一步間違えば、シグナム副隊長が消し飛んでいましたよ？そこの所きちんと分かっていますよね？」

「いや、な。極力威力は抑えたし、なにより、リミッターが掛かっている状態では本来の威力は出せないからな」

「だから？」

「いや、あの。……………はい、すみません」

怖すぎる。笑顔が怖すぎる。しかも、瞳のハイライトが消えてる。反射的に俺は謝った。……………情けないと言われてもいい。だが、今謝らないと俺は精神的にも肉体的にも殺されていたんだ！絶対に！俺が謝った事でカイトから発せられていたダークオーラみたいなのが消えた。その事に思わず、俺も周りのみんなも息を吐いた。……………いや、マジですみません。巻き添え喰らわせてしまって……………

「じゃ、じゃあ、カイト。シグナム副隊長を医務室に連れて行っても良いか？」

「ええ、むしろそれは貴方の役目ですよ？まさか、他人に押しつけたりなんかするつもり有りませんよね？」

やばい。このままでは、また復活しそうだ。急がないと！俺は急いでシグナム副隊長を抱えた。

「ヴィ、ヴィータ！医務室まで案内して貰って良いか！？」

「あ、ああ、分かった！（むしろ案内させてくれ！この空気、怖すぎるー）」

俺とヴィータは訓練室を飛び出すようにして出て行った。だから、俺達が出て行く際、ハラウン隊長が寂しそうな表情をし

ている事に、俺は気付かなかった。



「行きましたか……………」

ボソツとカイト君が訓練室の扉の方を向いて呟いた。……………こ、怖すぎるの。まるでお母さんみたい。そういえば、私この後、カイト君と模擬戦だったよね。……………逃げちゃ駄目かな……………

「あ、あの、カイトさん」

す、スバル！危ないよ！

「……………ん？どうかしましたか、スバル？」

……あれ、元に戻ってる。よ、良かった。スバルのおかげで何とかあの状態のカイト君と模擬戦するのは避けられたよ。ありがとう、スバル！

そんな事を思っている私を無視してスバルは再度カイト君に声を掛けた。

「先ほど言っていた事はどういう事なんですか？確か『対人で『光覇氷刃』なんて使わないでください』と言ってましたけど？」

「ああ、それはですね。まず初めに、僕らが使っているカバラ式は対人用として作られた訳ではない、という事は知っていますか？」

「えっ、と。すみません」

「そうですか。まあ、そう言う訳で今でこそ対人用の魔法もそれなりに登録されていますが、本来の役割は別なんです。……まあ、それで風が使った『光覇氷刃』はギリギリ対人としても使えますが、本質的には対人外用としての面が強いんです」

「それで、怒られていたんですか……………」

「ええ。まあ、威力は彼の言った通り、極力抑えられていましたし、シグナム副隊長は大丈夫でしょう」

……………本当にシグナムさんは大丈夫かな。なんだか心配になってきたよ。

「まあ、それはさておき。高町隊長、模擬戦の方よろしくお願いしますね？」

え？あ、ああ！

「うん、こちらこそよろしくね♪」

「はい、ではやりましょうか」

そう言っ、カイト君は先ほどシグナムさん達が模擬戦をしていた方向に向かって歩き出した。

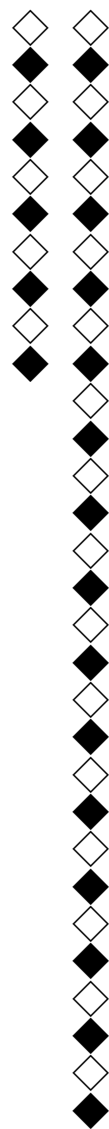
それに付いて行こうとして足を向けた時、目端に悲しそうな表情をしたフェイトちゃんが映った。

「ん？」

私は思わず足を止めて、フェイトちゃんの方を見ると、フェイトちゃんは私の視線に気付かず、訓練室の扉の方を見ていた。

……………なるほど、風君も罪な子だね♪

思わず胸中でそう呟き、私はそうしている内に少し遅れていたの
でカイト君の方に駆け出した。



一方その頃、風達はというと――

「なあ、教えてくれても良いだろ！」

――ヴィータに質問攻めにあっていた。
なんで、こんな事に…………

《なあ、銀。お前の事話しちゃ駄目か？》

《…………自力で切り抜けてくれ…………》

《何という、デバイスだ》

というか、お前が姿を見せればそれですむ話なんだが？…………
はあ、いつまでこの質問攻めに耐えれば良いんだ。

「まあ、ヴィータ。…………この世にはな、語れぬ事もあるんだ。

だから、そろそろ勘弁してくれないか？」

そう言って俺は和菓子をヴィータに差し出した。……………何処に
しまってたかどうかは聞くなよ！後、どうやって差し出したか
もな！

『……………誰に向かって言っているのですか、主？』

龍が呆れの籠もった声で言ってきた。だから、心を読むな！
そんな、コントのような事をしていると、ヴィータは今までの葛
藤していたのを止めたようだ。

「ち、しゃあねえな。今回は勘弁してやるよ」

ぶっきらぼうに言ってるが顔は緩んでいる。……………それほど、
甘い物を食べるのが嬉しいのか？

その後は日常的な事や先ほどのカイトの事などを雑談していた。
暫くすると、医務室に到着した。

「ここだ、風。……………シャル、いるか！」

「あれ？どうしたの、ヴィータちゃん」

「む？ヴィータか」

室内に入っていたヴィータの言葉に応えたのは『風の癒し手』
シャルと『蒼き狼』ザフィーラだった。

「あれ、何でザフィーラまで居るんだ？」

「先ほど、ここに来た」

いや、それは理由じゃないよな。
俺がそんな事を思っているとヴィータはそうか、と頷いていた。
……………納得できるのか！

「それで。ヴィータちゃん、どうしたの？」

「ああ……………って風。早く室内に入れ」

……………空気を読んでたら入り辛くて。

「いや、家族の団欒を邪魔するのはどうかと思って、控えていたんだが？」

「別に気遣って貰わなくても良いぞ。それより、シグナムを……………」

……ああ、軽いから忘れてた。

俺は眠っているシグナムを抱えたまま、室内に入った。すると今まで、椅子に座っていた風の癒し手が立ち上がった。

「え！シグナム！？どうしたの！？」

「あー、落ち着けシャマル。眠ってるだけだと思うから」

「あ、ごめんなさい」

………意外に風の癒し手は慌てん坊なんだな。ちょっと、びっくり。

「まあ、『風の癒し手』。一応、シグナム副隊長を見てくださいか？」

俺はそう言って医務室のベッドにシグナム副隊長を下ろそうと近づいた瞬間、腕の中で動き出した。

「……………ん？」

「あ、起きましたか。シグナム副隊長」

「む？神代か……………ん？」

そこでシグナム副隊長は自信の体が俺の腕に抱えられている事に気づいたようだ。

「ッ／＼／」

「ごふ!?!」

いきなり、無言のまま殴られた。

「って、シグナム副隊長! 貴方は鬼ですか! 危ないですよ!」

「そうだぞ、シグナム。風はここまでお前を運んできたんだぞ。感謝こそすれ、殴るような事はないと思うぞ」

「ふふ、仕方がないわよ、ヴィータちゃん。シグナムだって男の人に抱えられる事なんて初めての経験だと思うし、彼、格好いいもの。照れて当然よ♪」

「……………楽しそうだな、シャル」

「いやいや、風の癒し手と蒼き狼は心配してくれないのか! っていうか格好いい? 俺が?」

《……………主は鈍すぎます》

《ああ、そうだな》

念話で龍達がボソツと伝えてきた。……………？本当に何なんだ？

「まあ、いい。…………シグナム副隊長、ベッドに下ろしますよ？」

「あ、ああ／＼／＼」

シグナム副隊長の体に負担を掛けないようにゆっくりとベッドに下ろした。

そして、俺は風の癒し手に向き直った。

「では、風の癒し手。お願いします」

「……………ねえ、何で貴方はその呼び方を知ってるの？」

……………あ、やばい。ナチュラルに言ってた。

《……………風？》

やばい、銀も実体化^でてきていたら、ニッコリみたいな擬音が付く

ほどの声だ。カイト同様怖い。……どうやって、誤魔化そう。……
……無理だ！

「じゃあ、室外で待っていますので検査が終わったら呼んでください！」

「あっ、ちょっと！」

三十六計逃げるにしかず！

俺は今までの人生の中での最高速度を出したんじゃないかと思うぐらいの速度で、部屋を出て行った。

俺は部屋を出て行った所で座り込んだ。

まあ、部屋の外で居るだけだから、検査が終わったら直ぐに質問攻めされそうだけど。それまでに何とか、考えないと。銀が怖すぎる！
しかし、俺の願いは儚く散った。

「どうした？ 風、だったな」

「……………蒼き狼が何故ここに？」

「いや、検査中は俺も退出しなくてはならないのでな。それに気になる事もあるしな」

「……………(汗)」

どうする！マジでやばい！しかも今、反射的に蒼き狼って言ってしまった！どう言い訳する！……………何も思いつかないんだが……

《……………風。分かっているよな》

銀のプレッシャーが増したぞ！や、やばい！真剣に考えないと！

「おい、風。聞かせてもらおうか？」

「……………何をですか？」

「先ほど、シャマルに『風の癒し手』と言ったな。それに俺の事も『蒼き狼』と言ったな。……………何故その二つ名を知っている？」

「……………そんな事言いましたか？」

ここは白を切り続けるしかない！

「ああ、はっきりとこの耳で聞いたぞ。白を切ろうなんて考えるな
よ」

「……………ふ。さて、やはり模擬戦の方をm……………」

俺は逃亡を図ろうとした時に、医務室の扉が開いた。

「あ、検査の方は終わったわよ。ザフィーラ達も入っても構わないわよ。というより、入りなさい」

早！十分と経ってないよな！

「ああ。風、入るぞ」

「……………」

俺は蒼き狼に引きずられるようにして医務室に入った。

入るとベッドの上で上体を起こしているシグナム副隊長とその近くでヴィータが立っていた。

……………ここはできるだけ早くここを離脱するしかない！

「シグナム副隊長、体は大丈夫でしたか？」

「ああ、暫く休んでいればいいとの事だ」

「そうですか。それでは、俺はこれで……………」

「待て」

早急にこの場を離脱しようとしたら、蒼き狼に腕を捕まれた。……
……いつの間に人間形態に……………

「……………この手は何ですか？」

「先ほどの話の続きを聞かせてもらおうか？」

続きも何も、まだ何も話してないんですが！
そんな事を思っている内に四方を囲まれた。ご丁寧に蒼き狼が入り口を塞いでるし。……………はあ……………

「…………別に、俺自身は君等の事を知っている理由を話してやっても良いと思っている」

「なら……………」

「だが、この情報をくれた本人はそれを望んでいない。故に、俺からは何も話せない」

俺はそう言って口を閉ざした。……ちょっと、話しすぎたか。後で、銀に何を言われるか……………

「……………分かった」

「む？良いのか、シグナム？」

「ああ。だが、風。……………一つだけ聞いて良いか？」

「……………答えられるかどうかは保証できない」

「それでも構わない」

なら、良い。俺はシグナム副隊長に頷きを返した。
それを見て、シグナム副隊長は口を開いた。

「貴様にその情報をやった人物は……………生きているのか？」

……………答え辛いな。

俺が返答をするかどうか悩んでいると、念話がきた。

《……………良いぞ》

《良いのか、銀？》

《ああ、別に私だと明言する訳ではないのだし、構わない》

《……分かった》

俺は銀との念話を切って、シグナム副隊長の方を向いた。

「……生きている。彼女は今、名を銀としてな」

まあ、これぐらいなら良いだろ。明言はしてないから、銀もとやかく言えまい！

《……風》

いや、ごめんなさい。調子に乗りました、はい。
銀に心の中で謝っていると――

「そうか。……情報感謝する」

「……ああ、それでは俺は行ってくる」

俺は医務室から出る前に最後に独り言のように付け加えた。

「あいつは未だにお前等に顔を合わせるつもりはないらしい。……
……まっ、その内会う事になるかもな」

そして、医務室から出ると………八神部隊長が目を見開いて立
っていた。なんでさ。

他にも八神部隊長の肩にリインフォース？やハラウン隊長、気
絶している高町隊長を抱えているカイトがいた。………まさか………

「……なあ、カイト。もしかして、模擬戦は終わったのか？」

「ええ。僕も少しやりすぎてしまって、高町隊長をこちらに運んで
きたんです」

「……いつからここにいた」

「君が彼女について語りだした時ですかね」

俺が医務室に入り直した、直後か。……何故気付かなかった、俺。
………緊張していたという事か………

俺は医務室の扉を開けたまま、固まっていたがそのままいても仕
方がないことに気付き、扉から離れた。

「まあ、カイト。高町隊長をベッドに運んでやれ」

「ええ。分かっていますよ」

カイトは俺が扉を離れて直ぐに医務室に入り込んだ。……………さて、俺は逃げねば……………

そう思い、直ぐさま自室に逃げようと駆け出そうとしたら――

「……………待ってや……………」

「……………(汗)」

――服を捕まれていた。……………振り払っても良いのだが、今の八神部隊長を振り払うのは精神的にちょっと厳しい。ちょっと涙目になりながら、こちらを向いている八神部隊長を振り払うのは誰にもできまい。特に男は。

「……………なあ、凧君」

「……………何でしょう？」

「……………あの子が生き取るのは本当か？ほんま」

……………仮名まで言ったのは失敗だったな。確信を持って『あの子』って言ってるし。というか、涙目で質問は反則では！部隊長のような美少女だったら特に！……………すまない、銀。これを見て黙

っているのは無理だ！

「あー、はい。貴方が言っている『あの子』——初代リインフォースはまだ生きている、存在していますよ」

「ッ！？ど、どこに、何処にいるん！」

「うおッ！？」

ちよ、部隊長！迫ってくるのは止めて！……………あと、そこ！カイト！俺の状態を見ながら忍び笑いしてんじゃねえー！……………仕方がない、腹を括るか……………

「……………会いたいですか、八神部隊長？」

「ッ！？当たり前やろ！」

「彼女がそれを望んでいなくても？」

俺の問いかけに八神部隊長は一瞬言葉に詰まった。だが、少し悩んだ後、気丈に頷いた。

「それでもや！うちはあの子に謝りたい事があるんや！」

「……………そうですか……………」

仕方がない。後で確実に怒られるが………ま、人間は身勝手だからな。それに銀も本心では会いたいと思っているんだろうしな。

《銀、いやリインフォース。お前を出すぞ》

《ま、待て!》

リインフォースの声を無視して俺は八神部隊長に声を掛けた。

「それじゃあ、こんな廊下ではあれですし、医務室に入りましょうか?」

声だけ掛けて俺は再び医務室に足を踏み入れた。俺に続いて、八神部隊長とハラウン隊長が入室いた。

俺は先ほどからずっと立っていて、疲れたので失礼してベッドに腰を掛けた。

「さてと。………最後に確認しておきますが、彼女は未だに……いえ恐らくこれから先いつまでも、貴方と会う事を望まないでしょう。………それでも会いたいですか?」

「……………そうや、うちはあの子に会いたい!」

「……………その思い、聞き届けた……………」

俺は今まで服で隠していた、ネックレス型の銀十字を取り出した。

「『星天の魔導書』起動せよ……………」

『ッ！……………set up』

若干の抵抗はあったが何とか起動して、魔導書の形を取った。さてと、次は――――

「マスタープログラム管制人格、星天の魔導書が主、神代凧の下に来たれ！」

『……………くッ！』

魔法陣は現れたが銀が出てこない。っち、やっぱり抵抗するか。……………だが、主には勝てまい。

「さっさと出てこい、銀！」

『ッ！？』

主の権利を行使して強制的に引きずり出した。一度魔法陣が光り、

序で、現星天の魔導書の管制人格であり、元夜天の魔導書の管制人格でもある、彼女が出現した。

「……………」

彼女は無言のまま立ち上がり、元主である八神部隊長を見下ろした。

「り、リインフォース」

「……………なんでしょう、主はやて」

……………さてと、出るか。

俺はカイトに目配りし、医務室の扉を見た。それに、カイトは頷いて、扉に向かって歩み出した。俺もそれに倣い、二人で医務室から退出した。

医務室から出た俺は扉を完全に閉め、先ほど把握した医務室内ギリギリの防音結界を張った。

そのまま、俺達は医務室の反対側の壁に凭れ掛かった。

「良かったのですか、風？」

「……まあ、あいつも頑固な所があるから、ああでもないとい八神部隊長達の前には意地でも姿を見せなかっただろ」

「……………そうですね」

カイトは苦笑しながら肯定した。まあ、昔一緒に銀を八神部隊長達の所へ連れてこようとした事もあるし、その事を思い出しているんだろうな。

「ま、あいつが出てくるまで俺はここで待つつもりだが、お前はどうかする？」

「水臭いですね。親友ですよ。当然お供します」

「そうか」

俺はカイトの言葉にそう返して瞼を閉じた。……………一、二時間ぐらい待っていればいいか。

第五話（後書き）

水月

「前書きでも言ったが、何故こうなった？」

凧

「お前の無計画が原因だろう。ていうか、俺の口調をいい加減一定にしろ！」

カイト

「ええ、その通りですね」

水月

「うっさい！何故銀の事が今回でばれているんだ？……………本来ならもっと先の話だったのに……………」

凧

「お前の文才の無さと無計画が原因だろうな」

カイト

「貴方の文才の無さと無計画が原因でしょう」

水月

「……………今回は反論できない」

凧

「はあ、何で俺達の作者はこんな奴なんだ。確実に貧乏くじを引いたな」

カイト

「ええ。作者^親に恵まれていませんね、僕達は」

水月

「……………次回予告でも行こうか……………」

凧

「スルーしたな」

カイト

「スルーしましたね」

水月

「良いだろ、別に！ほら、さっさとやれ！」

凧

「逆ギレか……………まあ、いい。……………えー、次話は前回も言ったように今話の裏話——つまり、カイト編というわけだ」

カイト

「僕と高町隊長の戦闘＋αですね。まあ、作者の文才からして、まともな戦闘描写はなさそうですか……………」

水月

「もういいだろ！……………では次回も会いましょう！」

凧・カイト

「次話もよろしく願います！」

水月

「誤字脱字の指摘よろしく願います！」

第伍話 裏話（前書き）

予告でもしましたが、第伍話のカイト編です。……………ただ、予告では模擬戦を中心に書こうみたいな事を言っていたのに、これでは模擬戦の方が＋αに為ってしまったような気がします。

後、内容がグダグダになってしまいました。申し訳ありません！

……………まあ……………第五話 カイト編始まります！

第五話 裏話

「さてと、やりましょうか」

「うん、そうだね」

私たちは十メートルほどの間隔を開けて向き合っていた。ふう、いつも通りのカイト君だね。先のは怖こっぴどかったなあ。

私は胸中でそんな事を思った。だって、本当に怒った時のお母さんそっくりの雰囲気だったもん。

「じゃあ始めようか、カイト君。……レイジングハート」

『分かりました。stand by ready, set up』

「ではこちらも。……ギアス」

『良いだろう。精々頑張る事だ、主。stand by ready, set up!』

随分と人間らしいデバイス。しかも、銃剣型なんて珍しいなあ。私はレイジングハートを構えた。それに倣って、カイト君もデバイスを構えた。

「往くよ、カイト君！アクセルシューター！」

『Axel Shooter』

「ギアス！バーストシューター！」

『burst Shooter!』

カイト君は私のアクセルシューターに対し、魔法弾を拡散させて撃ち落としてきた。上手いね！

「エンシェントバスター！」

『Ancient Buster!』

いきなり撃ってきた砲撃に対し私は障壁を展開させて防いだ。ん、ちよつと軽いかな。

「ふう、今ので貰いませんか。……………流石、あの恐ろしい渾名を称しているだけの事がありますね」

……………カイト君？何を言ったのかな？

「ねえ、カイト君。『あの恐ろしい渾名』って何かな？」

「え？『管理局の白い悪魔』でしょう？僕らの部隊でも有名ですよ」

……………ふふふふふ、その渾名を言った事、後悔させてあげるの♪

私は手早く、そして気付かれないようにチェーンバインドでカイト君を縛った。

「おや？これは、バインドですか」

今頃気付いても遅いの！

「逝くよ、レイジングハート！ディバインバスター！」

『D i v i n e B u s t e r』

私が放ったディバインバスターはカイト君が抵抗する間もなく直撃した。やったの！

「どちらを向いておられるので、高町隊長？」

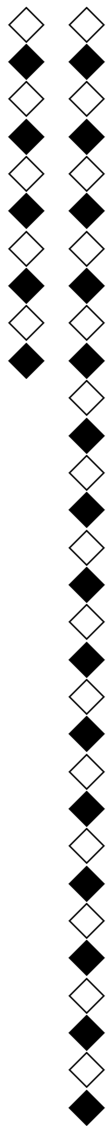
「え！？」

仕留めたと思った、カイト君の声が後ろから聞こえた。

「ま、これにて終幕という事で。ギアス、エレメントバスター」

『Element Buster』

その声が聞こえた瞬間、私の視界は黒で塗り潰された。



「ふう。手強い相手でした」

『本当にそう思っているのか、主？随分あっさり倒されたようだが？』

「まあ、空戦S+ランクの魔導師とはいえ、リミッターを掛けている状態では僕には勝てませんよ」

僕は空戦AAですよ？リミッターを掛けている魔導師に負けたり

はしません。

『それは嫌みにしか聞こえないんだが……主もリミッターを掛けているだろう？』

「そうですね。ですが、あの程度の挑発で視野が狭まるようなら、まだまだ、といった所でしょう」

『そうですか。後、主。風殿みたいにカートリッジは使われませんが、エレメントバスターはやりすぎでは？その証拠に高町隊長殿も気絶しておられる』

「……………医務室に運びましょう」

『賢明な判断かと……………』

誠実な奴ではあるんですが、偶に口うるさくて困りますね。

『我が口うるさいのは主だけだ』

そうですか。……………当たり前のように心を読んで返すのは止めてほしいのですが。まあ、無理ですかね。ある意味、一心同体的な所がありますしね、カバラ式は。

「とりあえず、高町隊長を医務室に運びましょうか……………」

僕は風に倣って高町隊長を抱えた。……う、流石に辛いですね。やはり、小柄なのが災いしていますか。まあ、高町隊長は軽いので運べますけどね。

抱えたまま、八神部隊長達が待っている所まで歩いていくとハラオウン隊長が駆け寄ってきました。

「なのは！大丈夫！」

「ハラオウン隊長、落ち着いてください。気絶しているだけですから」

「あ、ごめんなさい」

恥ずかしかったのか、ハラオウン隊長は身を縮こませました。

「さて、八神部隊長。高町隊長を医務室に運んでも宜しいでしょうか？」

「確かにその方がええんやろうけど………」

八神部隊長は困った様子でどこか別の方向に視線を向けながら、口籠もらせた。その視線を追って僕は納得した。

「なるほど。そういえば、高町隊長が模擬戦後に訓練をすると仰っていましたね」

「そうなんよ。今はほとんど新人達の教導はなのはちゃんに任せとるんよ」

へ？そうなんですか。ですが、高町隊長は直ぐには起きないでしょうし………そうですね、こうしましうか。

「八神部隊長。高町隊長は今すぐに復帰する事はまず無いので、代わりといっは何ですが、僕の知り合いを喚んで良いですか？」

僕の言葉に一瞬、八神部隊長は驚きを示して、考える素振りを取った。

「……………まあ、今のなのはちゃんの状態やったら、無理はさせられへんし、頼んでええか？」

「ええ、分かりました。では喚びますね」

「……………なあ、先から“よぶ”のニュアンスが“呼ぶ”やのうて、

“喚ぶ”に聞こえるんやけど……………」

「“喚ぶ”で合っていますよ。実際に召還するんですから」

僕の言葉に八神部隊長は目を見開かせていた。……じゃあ、ちゃつちやとしますかね。

高町隊長を静かに地面に下ろし、詠唱した。

「彼方より此方へ来たれ、殲滅の光を纏いし者よ！」

「なんか、物騒な単語出てへんだか！」

八神部隊長の突っ込みを余所に俺が召還した魔法陣にある男が存在していた。

「何処だ、ここは？」

魔法陣に出現した偉丈夫は立ち上がって首を巡らせた。……風と変わりませんね。

「……………ん？カイトか。て事はいきなり喚び出したのは手前だな！」

「はい。少し用事があったもので」

「……………なんだよ。条件次第では聞いてやらないこともないぜ」

偉丈夫——神代少将はニヒルな笑みを浮かべている。……………やっぱ、風に似てますね。

「鍛えてあげてほしいんです。あちらにいるスバル達を」

「ん？スバル？」

神代少将は僕のスバルという言葉に引かなかったのか、FW陣がいる方に視線を向けた。

「……ゲンヤのこのスバル嬢ちゃんか。随分と大きくなったもんだな」

「当たり前です。人は変わりゆく生き物なのですから」

「そうだな。……………いいぜ。先の話、受けてやるよ」

ふう。何とか了承が得られましたね。

僕は息を吐き、スバル達の方に向き直った。

「というわけで、この神代少将が高町隊長に代わって半日ほど教導してくれますので皆さん頑張ってください」

「なんだ、半日だけか。それならほどほどにしておかないとな」

「……やりすぎないでくださいね。まだまだ彼女達は若いのですから」

「ああ、分かってるよ」

「……………そういえば、中將はどのような用件でこの機動六課の近郊を彷徨っていたんですか？」

そう、僕が少将を呼べたのは中將がそれなりに近い場所にいたから。僕では本部から此処まで転移させるような離れ業はできませんからね。

「ん？ ああ、こいつを届けに来たんだ」

そうやって少将が懷から取り出したのは眠っている一人の小さな男の人でした。……………って……………

「アルじゃないですか。……………まさか、風に置いて行かれたのですか？」

「いや、俺が少しこいつに用事があったな。数時間前に用事も終わ

ったから届けに来たんだ」

「なるほど。道理でアルの気配がなかった訳ですね。……………僕が風に届けておきましょうか？」

「ああ、頼む」

少将はアルを僕に渡して、じゃ、行ってくるわと言いながら僕の肩を叩いて、スバル達の方に歩み出した。といっても、それほど離れていませんが。

僕は再び、高町隊長を抱え直して、ハラオウン隊長を見た。

「さて。ハラオウン隊長、医務室に案内して貰っても？」

「え？で、でも、エリオ達が……………」

「大丈夫です。あれでも常識は弁えている人ですから」

まあ、暴走はしますが。

僕はそう心の中で付け足した。

「ほら、早く案内してください。僕では何時までも抱え続ける事は不可能です」

「……………分かった……………」

ハラオウン隊長は言いながらもちらちらとスバル達の方を見ている。まあ、気持ちは分からなくはないですが。

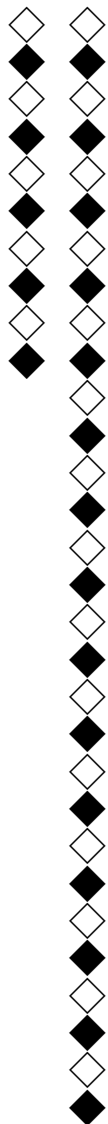
暫くしてやっと歩み始めたので僕はそれに付いていった。……

…何故か、八神部隊長まで付いてきていますが。

「八神部隊長。仕事は宜しいので？」

「大丈夫や。それにうちもなのはちゃんの方は心配やし、シグナムの事もあるしな」

ああ、そう言う事ですか。そうですね、家族は大切にされた方が良いでしょう。………そういえば、スバル達は大丈夫でしょうか？
ちょっと心配ですね。



私たちはカイトさん達が立ち去ってから無言のまま、立ち尽くしていた。いや、だってね。

凧兄のお父さんの洸哉さん、相変わらず威圧感が半端ないのです

が。

「じゃあ、まず自己紹介からだな。俺は凧とカイト達が所属している部隊の隊長を務めている神代洸哉少将だ。半日だけだがお前等の教導をさせて貰う。よろしくな」

「私はティアナ・ランスター二等陸士であります！こちらこそよろしく願います！」

「私はスバル・ナカジマ二等陸士であります！よろしく願います！」

「僕はエリオ・モンディアル三等陸士であります！よろしく願います！」

「わ、私はキャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！よろしく願います！それでこちらはフリードリヒです」

「きゅくる〜」

「元気だな。いやあ、若いって良いな、おい」

その外見で言われても説得力有りませんよ、洸哉さん。以前見た時と、外見がほとんど変わってないってどういう事ですか。確か、四十歳超えてますよね。どう高く見積もっても二十代後半なんです。が。

考えている私に洸哉さんから声が掛かった。

「お前はゲンヤの娘のスバル嬢ちゃんだな。久しぶりだな。ゲンヤは元気か？」

「あ、こちらこそお久しぶりであります。お父さんは元気にしています」

「そうか。最近会ってなかったからな。この後にも久しぶりに顔を見せに行くか」

頷きながら、洸哉さんは呟いた。……お父さん、驚くだろうな。

「まあ、それは後回しにして。お前等の教導だな。俺は高町戦技教導官のように上手くはないだろうが、全力で鍛えてやるから安心しろ」

……いや、それは安心できないんですけど。風兄に昔、父上は人外の化け物だから気を付けた方が良くぞ、って言ってたような………生き残れるかなあ。

「では、始めるぞ！」

………みんな、頑張って生き残ってね。



後に彼女達は語る、

「高町隊長の教導が天国に見えました」

と。

この時、彼女達がどのような教導を受けたのかは彼女達と神代少将以外に知る者はいない。



一方で、カイト達は。

「……………」

「……………」

「ちょっと、沈黙が辛いですう」

「それは言うたらあかんで、リイン」

僕らはほとんど無言のまま、医務室に向かって歩いていった。まあ、リインの言い分は分かるのですが……………ふむ。

「そういえば、ハラOWN隊長」

「ん？どうしたのカイト君？」

「いえ。ふとした疑問なんです、聞いても宜しいですか？」

「？別に構わないよ？」

そうですか。では、遠慮無く。

「彼氏はいますか？」

「え！？い、いや。いないけど……………」

「そうですか。では風の事はどう思われていますか？」

「えっ／＼／＼どうって言われても／＼／」

ふむ。これは全くの脈無しという訳ではなさそうですね。

僕はチラリと八神部隊長に目配らせをした。それに気付いた八神部隊長は意地の悪い笑みを浮かべて頷いた。

「ふっふっふっふ、フェイトちゃん。どうしたや？答えられへん事なんか？ほら、問われた事には答えんと！」

「は、はやてまで！？いきなりそんなことを言われても／＼／」

「ほらほら、フェイトちゃん。吐いた方が楽になるで！」

「えっと……あ！ほ、ほら！医務室に付いたよ！」

「「ちっ！」」

「舌打ち!？」

いや、舌打ちもしたくなりますよ。医務室め、何故もう少し遠くになかったんですか……………

仕方なしに部屋の扉を八神部隊長が開けようとした時、中から声が聞こえた。

『……別に、俺自身は君等の事を知っている理由を話してやっても良いと思っている』

「ん？なんや？」

あ、ちょっと不味くないですか、この状況。

僕は今の風の言葉で何について話しているのか悟ってしまった。
そして、これから彼が紡ぐであろう言葉を八神部隊長に聞かせる危険度も。

『……風。……………一つだけ聞いて良いか？』

『……答えられるかどうかは保証できない』

「シグナムは何を言っとるんや？」

本当に不味いですね。八神部隊長は今のところ何について議論しているのか分かっていなさそうです……………今後、そうだとは限りません。……………でも、どうしましょう？ここに僕達も用事があるのですし、この場から引き離すことは不可能。

「あー、八神部隊長」

「ん？どうしたんや、カイト君？」

「ちょっと、この後の会話は聞かない方が良いですよ」

「どういうk——」

『貴様にその情報をやった人物は………生きているのか?』

『………生きている。彼女は今、名を銀としてな』

あ………彼女なんて言ったらばれますよ、凧!特に今は八神部隊長がいるんですよ!

僕は恐る恐る八神部隊長の方を見ると………

「……彼女?銀?………そういえば、初めて会ったはずのラインにも不可解な事を言っていたような………」

………まだ大丈夫そうですが………時間の問題ですね。

『あいつは未だにお前等に顔を合わせるつもりはないらしい。………まっ、その内会う事になるかもな』

「え!?!まさか!?!」

あゝ、辿り着いちゃいましたか。まあ、あれほど伏線を張っていましたが、今の会話を聞いたら、分かりますよね。………僕の責任ではないですね?

僕が責任について考えていると医務室の扉が開き、凧は僕らを視

界に納めて固まった。ま、当然ですね。ここに僕達が……特に八神部隊長がいるとは思っていなかったでしょうし。

「……なあ、カイト。もしかして、模擬戦は終わったのか？」

呆然としたまま、凧は口を開きそんな事を問うてきた。

「ええ。僕も少しやりすぎてしまって、高町隊長をこちらに運んできました」

「……いつからここにいた」

「君が彼女について語りだした時ですかね」

「……………まあ、カイト。高町隊長をベッドに運んでやれ」

「ええ。分かっていますよ」

僕は道を空けてくれた凧を通り過ぎて、医務室内に入り、凧と同じく呆然としているシグナムさん達を置いて、高町隊長を空いているベッドに運んだ。

ベッドに高町隊長を置いた時にヴィータさんがまず初めに気を取り戻した。

「なのは！？大丈夫なのか！？」

「落ち着いてください、ヴィータ。……医務官の方、高町隊長をお願いしても？」

「え？……あ、分かったわ」

検査中の間、僕はできれば室外に行きたかったのですが、扉付近ではまだ凧と八神部隊長が話し合っていて、少し……いえ、かなり出づらかったので高町隊長から視線を逸らして、壁の方を見や

った。
そんな僕を気にせずに背後では検査が始まったようだ。まあ、気にしなければ問題ないでしょう。しかも、多少呆然としたままなのか、医務官の方、風の癒し手は僕に対して何も言っていない。検査の方は大丈夫でしょうか？

僕は暇だったので扉の方に視線をやるとそこには凧に詰め寄っている八神部隊長とその対処で困っているという珍しい姿の凧が見られた。思わず忍び笑いをしてしまって、その事を認識したのか、凧がこちらに鋭い視線……殺気すら混じっているような視線を向けてきた。ま、怖くないですけどね。

そんなこんなしている内に高町隊長の検査が終わり、凧が八神部隊長とハラオウン隊長を連れて室内に入ってきた。凧はそのまま、空いているベッドに腰を掛けた。

「さてと。……最後に確認しておきますが、彼女は未だに……いえ恐らくこれから先いつまでも、貴方と会う事を望まないでしょう。……それでも会いたいですか？」

「……………そうや、うちはあの子に会いたい！」

「……………その思い、聞き届けた……………」

いや、風。何、変なところで格好付けているんですか。顔が格好良いんですから、フラグが立っちゃいますよー！まあ、見守る側としてはそれも面白いですけど！

「『星天の魔導書』起動せよ……………」

『ッ！……………set up』

若干の抵抗はあったようですが、何とか起動したようです。星天の魔導書の形を取っています。……………という事は、次はあれですね。

「マスタープログラム管制人格、星天の魔導書が主、神代風の下に来たれ！」

『……………くッ！』

魔法陣は現れたが銀、いえ違いますね、リインフォースが出てこない。抵抗しますね、リインフォース。ま、無駄に終わりそうですが。

「さっさと出てこい、銀！」

『ッ！？』

凧の言葉で一度魔法陣が光り、序で、現星天の魔導書の管制人格でもあり、元夜天の魔導書の管制人格である、リインフォースが出現した。

「……………」

彼女は無言のまま立ち上がり、元主である八神部隊長を見下ろした。いや、何度見ても大きいですね。身長で負けているような気がしますよ。

「り、リインフォース」

「……………なんでしょう、主はやて」

感動の再会というやつですね。……………ん？

視線を感じたのでその方向を見てみると凧が医務室の扉の方に目配りした。僕はそれに頷き、扉に向かって歩き出した。そして、そのまま僕達は退出した。

医務室から出た凧は扉を完全に閉め、医務室に防音結界を張った。
なるほど、立派な気遣いですね。

そして僕達は医務室の反対側の壁に凭れ掛かった。

「良かったのですか、凧？」

「……まあ、あいつも頑固な所があるから、ああでもないといと八神
部隊長達の前には意地でも姿を見せなかっただろ」

「……………そうですね」

僕は苦笑しながら肯定した。昔の事を思い出しますよ。

「ま、あいつが出てくるまで俺はここで待つつもりだが、お前はど
うする？」

それは言うまでもないでしょうに。

「水臭いですね。親友ですよ。当然お供します」

「そうか」

凧はそう言って瞼を閉じた。それに倣って僕も瞼を下ろした。…

…まあ、大体一、二時間といった所ですか。……………あつ。アルの
事どうやって切り出しましょうか。時期を見失ってしまいました。
……………まあ、後で良いですね。

第伍話 裏話（後書き）

水月

「ほとんど、第伍話を写しただけになってしまったような……………」

凧

「写したようにしか見えないぞ。というか、真ん中当たりかなり無茶苦茶だな」

カイト

「ええ、写しですね。まあ、これが僕達の作者^親の限界でしょう」

水月

「……………今回はさっさと次回予告をしようか！」

凧

「……………あー、今回は日常編を予定しているらしい」

カイト

「僕達の隊長陣に対する呼び方なんかが変わるかもしれないそうです」

凧

「ま、作者次第だな」

カイト

「ええ。なんとなく嫌ですが」

水月

「という訳で、第陸話をお楽しみに！」

凧・カイト

「……………よろしくお願いします！」

水月

「誤字脱字の指摘よろしくお願いします！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7293m/>

魔法少女リリカルなのは～時空の守護者～

2010年10月11日06時41分発行